

## 現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究) シート

法人名	国立大学法人大阪大学	学部・研究科等名	生命機能研究科
-----	------------	----------	---------

### 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 I 教育の実施体制

### 2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名：教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

分野を越えた融合的な考え方をもち、国際的に通用する人材育成という教育目的を達成するために、以下の3つの取り組みを推進した。

#### 1. 英語教育の強化

国際化に向けて、英語圏出身の特任教員の活用や外部講師の招へいを行う体制を整備し、以下のプログラムを新たに提供することにより、英語教育を更に強化した。

(生命機能研究科 (作成))

開始年度	プログラム内容	目的	講師	備考
平成 20 年度 (平成 21 年度 継続実施)	①英語講義	聞く能力の向上	英語圏出身の特任教員	選択科目:2単位
	②英語論文の執筆指導	書く能力の向上	英語圏出身の特任教員	通年週1回、2クラス、合計約 10 名(少人数制)
	③英語コミュニケーション力養成教室	話し、表現する能力の向上	外部講師	平成 20 年度:半年週1回、3クラス 平成 21 年度:通年週1回、8クラス、各クラス 10 名前後(少人数制)
平成 21 年度	④英語聞き取り課題	反復して正確に聞く能力の向上	研究科教員(在米歴 22 年)	通年週1回、Web 配信、学生約 30 名が参加
	⑤英語で議論する English Journal Club	時事トピックによる聞き、話す能力の向上	グローバル COE プログラム特任助教	年4回

また、グローバル COE プログラム等の資金を活用して、学生の国際学会発表や海外の研究機関での研修、共同研究の実施等の「海外活動支援 (英語環境に直接触れる; 平成 20 年度:31 件、平成 21 年度:27 件)」も継続実施している。

これらにより、学生の英語での発表、コミュニケーション能力は向上しており、平成 21 年には2名の学生がマサチューセッツ工科大学で開かれた合成生物学国際大会「iGEM」で金賞を受賞した。

#### 2. 学生の主体的な活動の推進

教育プログラムに学生が参加する体制を新たに構築し、教育内容・教育方法の向上に取り組んだ。

##### ○平成 20 年度

学生主体の実施委員会を発足させ、学生による研究合宿(73名参加)を教育プログラムに加えた。当研究科の目指す異分野融合による生命科学の新たな研究分野の創造と発展及びそれを担う若手人材の育成を分野を超えた学生自身の主体的な融合活動によって進めようとする試みである。

##### ○平成 21 年度

平成 21 年度の研究合宿には外国から学生や若手研究者を招待し、分子細胞レベルの動的イメージングなど、様々な生命機能の解明に今後重要となる研究手法とその開発について、全て英語で議論を行った(平成 21 年 7 月開催:海外からの学生・若手研究者 12 名、当研究科学生 72 名参加)。

最先端の生命科学研究の発展を担う各国の若手研究者との議論は、当研究科の学生に多大な刺激を与え、新たな教育プログラムとして顕著な教育的効果があった。合宿終了後のアンケートでは、「融合研究につながる情報交換が出来た」「異文化交流が出来た」など、肯定的な評価が高く、95%の学生が、次回も是非参加したい、また、都合が合えば参加したいと回答した。

#### 3. 新たなキャリアパスを創出できる教育体制の整備

平成 20 年度から、大阪大学産学連携推進本部の「協働育成型イノベーション創出リーダー養成」プログラムにより、企業等での研修機会の拡充に取り組み、インターン活動を単位として認定した。

この制度により、2名の大学院生と1名の大学院修了者がNHK およびセイコーエプソンで3ヶ月間インターンを行い、このうち1名がセイコーエプソンに就職した。